

古典落語大系

第八卷

上方篇

責任編集

江國 滋

大西信行

永井啓夫

矢野誠一

三田純一

三一書房

古典落語大系 第八卷

一九六九年七月三十一日第一版第一刷発行
一九七三年一月十五日第二版第二刷発行

編者 江國 滋・大西信行・永井啓夫
矢野誠一・三田純一

© 一九六九年

発行者 田川敬吾

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(二九一)三二三一・五番

郵便番号一〇一

振替東京八四一六〇番

印刷所 株式会社三陽社

製本所 東京美術紙工

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

古典落語大系 第八卷（上方篇） 目次

兵庫船（ひょうごぶね）——いわゆる（旅タネ）について……………七

不精の代参（ぶしょうのだいさん）——妙見さん……………三

地獄八景（じごくばっけい）——鴈治郎の死……………四〇

瘤辨慶（こぶべんけい）——落語角力……………五

べかこ——道明寺……………六

日和ちがい（ひよりちがい）——雨だっせ……………九

舟辨慶（ふなべんけい）——花街物類呼称……………一〇五

ちしゃ医者（ちしゃいしゃ）——春団治の衣装哲学……………一四

仏師屋盗人（ぶっしやぬすっと）——盗人……………一六

皿屋敷（さらやしき）——お菊の小囃……………一四五

鼻捻じ（はなねじ）——花月亭九里丸……………一五

茶漬幽霊（ちゃづけゆうれい）——可愛い女……………一六

牛の丸薬（うしのがんじ）——大和炬燵……………一七

後家馬子（ごけまこ）——もとは役者……………一八

景 清（かげきよ）——東京コンプレックス……………二〇六

質屋蔵（しちやぐら）――天満天神界限……………	三〇
鍬　　潟（くわがた）――太閤はん……………	三六
綱　　七（つなひち）――桂文我と上方の芝居噺……………	五四
胴乱の幸助（どうらんのこうすけ）――胴乱考……………	五六
苦ヶ島（とまがしま）――大名行列……………	六三
代書屋（だいしゅや）――中浜代書事務所……………	九三
土橋萬歳（どばしまんざい）――もうひとつの『土橋萬歳』……………	一〇七

解説　三田純一

装幀
長尾みのる

古典落語大系 第八卷（上方篇）

兵庫船（ひょうごぶね）

「さあ、こっちへ出といで……。はやいもんで、もうここが兵庫の鍛冶屋ヶ町の浜や。ここから船で大阪まで……」

「あの船か」

「大きな声やな」

「わい、船きらいや」

「コレ、お前、野崎まいりしたとき、舟に乗ったやないか」

「あのときは好きやったが、いま、きらいになった」

「なんでや」

「清やん。わい、こないして旅してるけど、家のことが気になるのや」

「なるほど。年とった親があるさかい、親のことが気になるのやな」

「いいや、親みたいなのはいつでもええ」

「そんならなにが気になるのや」

「わいは、嬢があるよってに……」

「嬢ならわしにかてあるがな」

「お前とこの嬢と、うちの嬢がいっしょになるかいな」

「なんでや」

「お前とこの嬢は、来てから三年でも四年でも添うてるが、うちの嬢は、来てまだ間がない。新しい……」

「べつに古うても新しいても、嬢にちがいないやないか」

「旅に出るとき、うちの嬢がいいよったことが、耳の底に残ってるね」

「お前とこの嬢がどんなこというたんや」

「けども、お前とこの嬢、旅に出るときなんぞいうたか」

「そらいうたとも」

「どないいうた？ その口説を聞かせ」

「うちの人、旅へ出たら水がかわりますさかい、わずらわんようにして、一日もはよう帰って来とくなはれや、と、これだけいいよった」

「お前とこの嬢は、年は長いが口上は短いなあ。うちの嬢は、そんなことはいわん。旅立ちする宵に、わいが寝てる枕もとへちゃんと坐って、わいを起しよる」

「なんというて……」

「モシ、ちちの人。いっぺん起きしとくなはれ。よう寝てからに……。男いうものは悪性なもんや。自分さえ寝たらええと思うて、あての身にもなってくれたらよさそうなもんや。ちょっと、起きとくなはれえ……」

「オイ、なんという声、出すね。人が顔を見て笑うてるがな」

「嬢の声色や」

「声色なしでやってんか。ややこしいがな」

「ちょっと、起きとくなはれというのに、起きなはれんかいなあ」

「コレ、なにをするね。人の鼻をつかんで」

「嬢の身振りや」

「身振りかしらんけど、鼻が痛いかな」

「わいの鼻を持って起こしよったんや。わいが布団の上へ坐ると、わいの膝にもたれて、ほろっと涙をこぼしよるさかい、嬢、お前泣いてるな、というたら、あんたという人は胸欲なおかたや、こないいうさかい、なんでや、と聞いたら、お宅へ来ましてまだ聞かないというのに、あんたが、旅に出なはったら、だれを頼りにしますねんな、と、こないおっしゃる」

「おっしゃる、とは、どうや」

「そこでわいがいうてやった」

「なんとというた」

「うちには、おとつあんやおかあはんがいるやないか、というたら、おとうさんやおかあはんはええお方やけど、片時もあんたの顔を見んとたよりない……」

「ようそんなこといいよったな。わいはお前の顔を見ると、よけい心細うなるかな」

「そこでいうたんや。嬢、心配するな。行きは歩いて行くが、帰りは船やさかい、一晚のうちに帰ってくる。そしたら嬢がこちの人、三日が四日かかってても、大事おまへんさかい、かならず船にだけは乗っとくはんな。船というものは、板子一枚その下は地獄やおまへんか。もし途中でひっくり返るといふような、ことがはじまるというような、ことができたというような……」

「コレ、おんなじことを、なんべんいうねん」

「そこでいうたんや。もしわいが死んだらほかに可愛い男をこしらえて添うのやろ。そしたら嬢、なんのそんなことしまっかいな。あんたに死別れたら、黒髪を剃り落して尼になります。あてはうちでこない思っているが、男心と秋の空はかわりやすいよって、旅に出てええ女子はんでもできたたら、あてのようなお多福は見捨てなはるやろ。もし見捨てたら、淵川に蓋はないよってに川へでもはまって死にます。そのかわり、死んだら、毎晩仏壇のなかから迷うて出て、あんたと女子はんと寝てなはったら、あんたの前へかじりつく、と……」

「前のなにに？」

「臍に」

「コレ、臍にかじりつけるか」

「お前やさかいいうが、わいの臍は出臍や」

「出臍か。よっぽど出てるらしいな」

「わいもいうたんや。わいは旅をしているが、女心と春の空はかわりやすい」

「コレ、ちよつと待ち。春の空がかわりやすいか。秋の空とちがうか」

「嬢が秋の空ときたさかい、こっちは春とかえた」

「そんなことしないな。それでどうした？」

「もし、留守中に、男でもこしらえるようなことがあつたら、ただじゃおかん。淵川には蓋がないよって、川へはまッて死ぬ。死んだら、毎晩仏壇から迷うて出て、お前と男が寝てるころへ行ッて、お前の前へかじりつく」

「そんなら、お前とこの嬢も出臍か」

「ところが嬢は出ていない。凹んでる」

「それではかじりつけんな」

「なんぼわいが出齒で、口が大きいでも、かじりつけん。そのときは、ちりれんげですくいとる、というたんや」

「豆腐やがな。そんなこといわんと、船に乗り」

「いやや、ひっくり返る」

「大丈夫。わいがひきうけてやる」

「清やん、お前のひきうけるは、あてにならん。このまえ、お前がひきうけて頼母子たのもしにはいったら、三つ掛けて

つぶれたがな」

「船と頼母子がいっしょになるかいな。大丈夫や、わいが太鼓のような判を押してやる」

「その一言で船に乗るわ。友だちのお前が、太鼓のような判を押すというのやさかい……。べつに判は押さいでもかめへん、その太鼓のような大きな判だけ見せといて」

「そんな判があるかいな」

「そんなら、ない判を押すというたのやな。つまり、謀叛するつもりやな。さ、告訴したる、おいで！」

「なにをいうてるね。もしもお前が死んだら産んでかえす」

「だれが産むね？」

「うちの嬢に産ますがな」

「お前とこの嬢、いくつや」

「二十七や」

「二十七の女が三十一の男を気張り出すか」

「コレ、そんなこというてんと乗り」

「いや、乗れへん」

いやがってる男をむりにつきますと、歩板もやみが馴なれてますので滑すべってずるずると船のなかへ乗のりてしまします。

「君がなにほどすすめても、我輩は船には乗らん！」

「なにが我輩や。胡麻の蠅はみみたいな顔して。もう船に乗のりってるがな」

「そんなら、わい、もう死んでるか」

「コレ、そんなこというもんやない。まだほかに、こないして、きょうさん乗のりってはるやないか」

「ほんに。命知らずもたんとあるなあ」

「コレ、船には禁句といふことがあるのをしらんのか」

「知ってる。海鼠なまこの干したんやろ」

「それは煎海鼠きんこんこや」

「小さい人か」

「それは、ちんこ。禁句というたら船のなかではいうたらいかん言葉のことや。死ぬとか、蛇ながもろのはなしとか、この船はいつ着く、とか、いうたりすると、船頭はんがいやがる」

「そんなら、隅のほうで、死んだようになっておくわ」

「それがいかんのや」

「往生するなあ」

「往生、がいかん」

「ああいえばこういうし……、いつそ殺すなら殺せ」

「モシ、あんたはんのおつれでつか。えらい船がきらいとみえますな」

「へえ、船心が悪うて困ります」

「船のいやなおかたは、よう酔うものだす。酔わんまじないに船框ふながまちを三べんねぶるときなはれ」

「いや、おおきにありがとうさんでおます。オイ、喜やん。船框を三べんねぶり」

「船框を三べんねぶったら、どうなるね」

「船に酔わんまじないやと」

「そんなら、お腹はいっぱいやけどよばれるわ。どなたはんも、お先に」

「だれもねぶりはらへん」

「チッ……えらい砂や」

「吹きんかいな」

「吹くのを忘れてた。ブーッ……あ、えらいことした」

「どないした？」

「吹いた拍子に、目のなかへ船がはいった」

「船がはいったりするかいな。砂が目へはいったんやろ」

「ああ、痛タ」

「コレ、目をこすつてもとれへん。目を吹くのや」

「フーッ、フーッ……」

「自分で吹いてもあかへん。目をこちへもっておいで」

「台ごとか」

「台ごと……!? 目に台がついてるか」

「頭といっしょにか？」

「目だけでもってこられるかいな。頭ごとや」

「貸すよってに、あいたら返してや」

「あたりまえや。フーッ……、どうや」

「おかげで船が出た」

「砂が出たんや」

そのうち、時間がまいますと、船頭さんが大声で、

「出しますぞおー。ないかのおー」

「ないわのー」

「そんなこと合わないな」

乗前がきまりますと、船頭さん、もやいづな舷綱をときまして、あゆみ歩板をひきあげました。赤樫の長い樫を一本張りますと、

船は波を切つて岸をはなれます。沖へ出ますと、もう櫓は立ちまへん。櫓にかかりますと、船頭さん、肌をぬぎます、赤松を割つたように陽にやけた腕によりをかけて漕ぎ出しました。

「ヤ、うんとせい！」（囃子入り『船唄』へ兵庫浜より、船漕ぎ出だすえ……）

船は沖へ沖へと出てまいります。そうこうしているうちに、追風おいてが吹いてきましたので、船頭さんは帆造はしらえ。

「オーイ勘六やあ。帆桁をまわせえー」

「フワイイ」

「コレ、喜やんなにをしてるのや」

「いま、船頭が頬ほべたをまわせ、というてるさかい……。頬はこれくらいまわしたらええか」

「お前の頬やないがな。帆桁や」

「帆桁でなんや？」

「向こらの真中に、太い、両端の細うなった木があるやろ」

「フン、あの雑煮箸の親方かいな」

「雑煮箸の親方……!? あれが帆桁や。あれをまわせというてるのや」

「わいは、また、頬かと思うた」

「オーイ、お客さん。ド頭なまに気をつけとくなされや。コレ、お客さんド頭なまがとびますぞ」

「フワイイ」

「コレ、なにをしてるね」

「船頭がド頭がとぶというてる。ド頭がとんだら、方角がわからんようになる」

「ちがうがな。ド頭がとぶというたのは、あの帆桁をまわすと、お女中の頭にさわって、櫓や簀が落ちる。もし、海へはまったら取れんさかい、あないいうてよるね」

「なににつけても危い船や」